

年表で振り返る、これまでの5年間

2018

世界・国内の出来事

- ・米朝史上初の首脳会談
- ・西日本豪雨・北海道地震の被害多数
- ・平昌冬期五輪日本最多メダル

町内の出来事

- ・町制施行50周年記念事業を展開
- ・おうらこども園開園
- ・邑楽町中央公民館開館



2019

- ・天皇陛下が即位、元号が「令和」に
- ・消費税率が10%に引き上げ
- ・沖縄首里城が焼失

- ・台風19号が接近、対策本部を設置
- ・町内公共施設の敷地内が禁煙に
- ・ケーブルテレビと協働製作の『まちドラマ』が完成



2020

- ・新型コロナウイルス感染症が流行、政府が緊急事態宣言を発令
- ・菅首相誕生、新内閣発足

- ・町独自のコロナ対策支援策を実施
- ・各種イベント・教室などが中止に
- ・トンガ王国との文化交流セレモニーを開催



2021

- ・東京五輪・パラが1年延期で開催
- ・岸田首相誕生、新内閣発足
- ・大谷翔平選手メジャーMVP受賞

- ・町でコロナワクチン接種開始
- ・町がトンガ王国のホストタウンに決定
- ・電子地域通貨「コハクペイ」がスタート



2022

- ・ロシアがウクライナへ侵攻
- ・安倍元首相が襲撃を受ける
- ・成年年齢が18歳に引き下げ

- ・トンガ王国へ噴火災害支援の見舞い金を贈呈
- ・おうらバスターミナル・町内循環バス運行開始
- ・農産物直売所「でんえんマルシェ」がオープン

2023

- ・新型コロナ「5類」へ移行
- ・イスラエル・パレスチナ武力衝突

- ・町制施行55周年記念事業を展開
- ・おうらてくてくアプリ配信スタート

55周年記念事業

(一部抜粋)



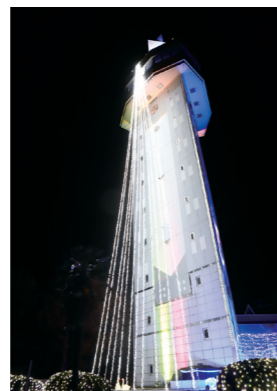
5月5日 鶉古城まつり



10月1日
おうらスポーツフェスティバル



8月20日 おうら祭り



11月18日～
タワーイルミネーション



令和6年1月20日
オーランドさんお誕生日会



【特集】

未来への歩みをこれまでも、これからも 令和5年

邑楽町 町制施行55周年

令和5年4月、邑楽町は町制施行55周年を迎えました。今回の特集では邑楽町が誕生した当時の経緯と、約半世紀におよぶ町の歴史の中で特に激動だったこの5年間の出来事を振り返ります。

三村合併により生まれた邑楽町、そして邑楽町へ

中野村、高島村の二カ村が合併した「中島村」に、千代田村の一部(旧長柄地区)が編入合併したことにより、昭和32年(1957)に「邑楽村」が誕生しました。

邑楽村誕生当時の状況は人口約1万6千人、世帯数約2千8百世帯の農村で経済的基盤に乏しく、また隣接町村の駐留軍の撤退により転出者が多く、人口は減少の一途をたっていました。当時はまだ公民館も図書館もなく、衛生面も不十分だったことから新生児の死亡率も高い状況にありました。村の財政状況は厳しく、当面の目標は農村としての立地条件の整備と住民福祉の増進をはかるこ

とが急務でした。

昭和30年代後半になると高度経済成長の波により、村内の社会構造にも大きな変化がありました。村内にもいくつかの企業の工場が進出したこともあり、農業中心だった人びとの生活は次第に他産業へと移り変わり、村内の業態生産の割合は都市的業態人口が5割を超える程になりました。

そういった村の状況から、更なる発展を求めて、村を町とする

る気運は急速に高まっていきま

した。そして昭和42年11月の村議会において「議案第六十一号 邑楽村を邑楽町にすることに決する旨の届出があり、町とする旨の届出があり、町として昭和43年4月1日には中野小学校屋内運動場で町制施行祝賀会が行われ、名実共に「邑楽町」が誕生しました。



◀町制施行開始を報じる当時の広報紙 (広報おうら第33号 昭和43年6月10日発行)

【出典：邑楽町誌(昭和58年2月20日発行)】



邑楽町中央公民館 開館5周年記念

町の文化発信の拠点として

町制施行55周年記念と併せ、本年度開館5周年を迎えた中央公民館の現在について、館長の藤田さんにお話を聞きました。

開館5周年を迎えた中央公民館

（藤田館長）中央公民館は、平成30年9月1日に開館し5年が経ちました。開館記念式典・オープニングイベントでは、2日間延べ5,500人が来場。社会教育活動の拠点として、また文化芸術の発信基地として、町民自身が集い・学び・つながりながら、表現者・発信者として新たな文化を創造し発信する場、町の知名度を高め交流人口・定住人口を創出する町づくりの拠点として大きな役割を果たしてきました。



邑楽町中央公民館 館長 藤田 和良 さん

活動の原点でもある「集う」ことが大きく制限され、受け継がれてきた伝統行事や町民同士をつなぐイベントを中止、縮小せざるを得ませんでした。それとともに、少子高齢社会が進み、地域の連帯感の希薄化や社会活動にまで大きな影響を与えました。このような中で、今、公民館は何をすべきなのか、今こそ「集う・学ぶ・つながる」の原点に立ち戻り、これまでの公民館の存在価値を維持しつつも、時代の変化やニーズに合った新たな役割や理念を模索していく必要があると考えます。

町の文化を担う新たな団体が誕生

人口減少の中、町民の自己表現を応援し、文化芸術を発信する拠点にしていこうと、さまざまなワークショップを開催し、これまで公民館を使ったことのない人も含めて、多くの人に呼びかけながら事業を進めてきました。その結果、「邑楽町民劇団（仮）」や、「邑楽町民吹奏楽団」、「合唱団「コロ・アックア」、「おうら少年少女合唱隊SING!」など、町の文化を担う新たな



8千人の大観衆の前で邑楽の子どもたちは堂々と歌声を披露

な団体が誕生し、多彩な活動を始めています。

中でも、おうら少年少女合唱隊SING!は、令和4年6月11日、秩父宮ラグビー場（東京都港区）で町と文化交流を続けてきたトンガ王国の復興支援を目的としたチャリティーマッチのオープニングで、8千人を超える大観衆の前で日本とトンガ王国の国歌を斉唱しました。その後、おうら少年少女合唱隊SING!のメンバーの中から、町の自然や歴史、文化などを学ぶ連続講座「邑楽学」に大人と一緒に参加する子も。町が大好き、公民館で働きたいというほど、公民館ファンが現れるなど、まいた種が着実に実を結び、花開こうとしている実感があります。

5年間に訪れた数々の著名人

音響効果の優れた邑の森ホールでは、これまで国内外第一線で活躍するアーティストが数多く公演しました。

落語家では、町出身の立川談四楼さんをはじめ、故六代目三遊亭円楽さん、その一番弟子の三遊亭楽生さん、講師の六代目神田伯山さん。ピアノリストでは、邑の森ホールのスタインウェイD1274の選定者でもある根岸弥生さんをはじめ、横山幸雄さんや仲道郁代さん、清塚信也さん。オペラ界からは、国際的に活躍されているソプラノ歌手の中嶋彰子さんから世界的なオペラ歌手の皆さんと共に、小学生を含む多くの住民有志が同じ舞台上に立ちました。さらに、



故三遊亭円楽さん独演会。邑の森ホールが笑いの渦に包まれる

ヴァイオリン奏者では町出身の若旅菜穂子さんをはじめ、ひばり弦楽四重奏団（漆原啓子・朝子さんなど）は、公演のほか、小学校で鑑賞教室を開催。児童がホールでのコンサートに足を運ぶ姿が見られました。

これらの公演を行ってきた分かってきたことがあります。アンケート集計によると県内はもとより、栃木県、埼玉県、茨城県、東京都、演奏者によっては大阪府や愛知県からも来館。公演前後に町に足を運ぶことで、町の良さ、魅力を知り、交流人口のみならず、移住したい、町に住みたいという声も出ています。

中央公民館ファンの裾野を広げる5大フェス

町民主体の文化芸術活動を支援するとともに、地域の文化芸術の創造的発展や継承発展を図り、また中央公民館の魅力を、より多くの町民に知ってもらうため、次の5つの「フェス」を開催。①おうら和太鼓フェスティバル（邑楽太鼓盛和会共催）、②おうらフラフェスティバル、③おうら子フェス、④ORAMUSIC FES、⑤邑楽町伝統芸能



今年で6回目の開催を迎えるORAMUSIC FES

フェスティバルです。

特に、若者の公民館利用が増加したORAMUSIC FESは、町内の3つのアマチュアバンドと一緒に企画し、最初はロックフェスとして立ち上げましたが、後に名称を変更し幅広いジャンルのバンドの参加につながりました。

また、おうら子フェスは子どもが主役、子どもたちが主体的に参加をするイベントとして町内の小中学校や育成会、文化団体、警察、消防、自衛隊など各種団体、関係機関と連携をし、令和4年に初めて開催。開館以降1日としては最多の4,183人が来場しました。さらに、伝統的な郷土芸能の継承、発展と地域の活性化を図る目的で始めた伝統芸能フェスティバルは、多くの子どもたちが積極的に参加したり、一時活動が低迷してい

長年にわたる公民館活動が評価される

令和元年度、障がい者の生涯学習支援で優れた活動をしているとして、「おうら青年学級」が文部科学大臣表彰を受賞しました。おうら青年学級は、知的障がい者の余暇活動の充実や自立を目的に平成16年度から月1回のペースで活動しています。

今後の展望と取り組み

少子高齢化、地域のつながりの希薄化など、さまざまな課題が山積みする中で、人生100年時代を見据え、一人ひとりがいかに幸せな人生を歩むのかを、これまで培ってきた地域とのつながりを生かし、住民自身が主役となり地域力を育む「学び」を実践するための拠点となるよう、公民館が果たすべき役割は重要であると考えます。

さらに、町の社会教育活動、公民館活動をリードしてきた団体の長年に渡る実績が評価され、令和2年度「優良公民館文部科学大臣表彰」を受賞。全国に約14,000館ある公民館の中で優秀館（2位）となりました。優秀館選出は、群馬県75年の歴史の中で初の快挙となりました。文部科学省として目指す公民館活動が邑楽町中央公民館に

そのためには、日頃からアンテナを高くし、利用者や地域住民の声に耳を傾け、より豊かな生活を送るには、より幸せに感じられる社会には何が必要かを問い続けています。最後に、「人づくりは、まちづくり」を基本に、地域社会で大きな役割を担う公民館が、地域に向き合っ

過去10年間の

年度	利用人数
H25	45,924
H26	52,200
H27	53,086
H28	54,101
H29	63,327
H30	88,330
H31/R1	97,599
R2	36,284
R3	62,813
R4	76,065

合っ、教育と文化のまちづくり」をさらに発展的に取り組んでいきます。

邑楽町中央公民館 開館5周年記念 利用者から見た中央公民館

中央公民館を利用する人たちにとって、公民館はどのような場所になっているのでしょうか。各団体の代表者や実際に公民館を利用している人たちにお話を聞きました。



念願だったホールの完成
私たちはそれに応えていく

(渡邊会長) 多目的ホールを有した公民館の建設はさかのぼること約20年前、町文化協会前会長の関谷智昭さんの頃からの悲願であり、建設前の検討段階にあつては、町との協議と調整を繰り返し行ってきました。そして平成30年の9月、ついに念願の中央公民館ホールが完成しました。

邑楽町は、昔から文化活動、公民館活動が大変盛んな土地柄で、一つの目安となるのが文化協会の会員数です。中央・長柄・高島公民館の各利用団体や茶華道会、音楽連盟など172団体、314人の会員から構成されており、県内35市町村全文化協会の中で5番目に多く、活発な文化活動、公民館活動を裏付ける数字であるといえ



利用する側の意見が反映されて建てられた中央公民館。展示スペースも見やすいとの声

利用者同士のつながりを強化していくことが課題
(夏目会長) 5年前に完成した中央公民館は町の規模からしてもとても立派なものが出来上がったと思います。ホールの設備も充実していても素晴らしいのですが、ホール以外の部分についてもイベントをやることに適した構造になっており、利用する人たちの意見が反映された造りとなっていて、とても使いやすく便利だという声をよく聞きます。

また、施設の良さだけでなく、公民館職員が利用団体をとでも手厚くサポートしてくれているという部分を強く感じます。本来、公民館で行うイベントなどは利用者側が主体となって運営し、公民館としては場所を提供していただくという形が普通だと思います。しかし邑楽



このように、今は中央公民館も十分すぎる程のサポートをしていただいています。逆にこの環境を維持していくことが今後難しくなっていくことも考えられます。人口減少はどの地域でも抱える問題であり、町の予算や職員数も今後は減少してい

町の場合は企画の段階から職員がいろいろな面で協力してくれていて、一緒にイベントを作り上げていってらっしゃいます。私はポイスカウトの事務局として他の市町村で活動する機会がありますが、他の地域はもっと事務的な対応をするところが多い中、邑楽町のように、ここまで協力的に働いてくれるスタッフがいるところはなかなかないと感じます。

ます。

そして、中央公民館ホールの完成によって、令和6年3月16日と17日の2日間に渡って開催される東毛地域圏文化フェスティバルの開催地をここ、邑楽町で行えるようになったことは、私たち文化協会にとって非常に喜ばしいことです。第5回目を迎える東毛地域圏文化フェスティバルは、太田市・館林市・板倉町・明和町・千代田町・大泉町・邑楽町の2市5町の文化協会合同の文化の祭典であります。これまでの開催地は、大泉町(2回)、館林市、太田市と大人数を収容でき、かつ展示スペースも十分に備える施設がないと開催自体ができませんでした。それが今回中央公民館ホー



ルの完成によって、ようやく自信を持って町で開催できる運びとなりました。

私たちがこの場所で文化活動を行えるのも、町がその活動に対して協力的であるおかげだと感じます。文化活動においてこれだけ熱心に、協力的に働いてくれるのは他の市町村ではまず見られないところであり、邑楽町の特徴的な部分です。

こうした町の協力もあって、私たちが文化活動を行える場所、そして環境は十分に整いました。そのことに感謝しつつ、今度は私たちがそれに応えていかなければいけません。少子化問題や新型コロナウイルス感染症の流行によって、昨今の文化活動は衰退の危機にあります。この課題に立ち向かっていくためには、行政と地域で連携し、知恵を出し合いながら取り組んでいかなければいけません。



く可能性もあります。そうなったときに、私たち利用者側がいかに協力していけるかが重要になっていくと思えます。今の環境を当たり前と思わずに、いろいろな努力の基に成り立っているということを、私たち利用者は忘れてはならないと感じます。

皆自分の所属する団体についてはもちろん熱心に取り組んでいると思えますが、自分たち以外の他の団体への協力というところも今後気にしていかなければなりません。公民館を利用する団体同士の横のつながりを強化し、個々ではなく全体で町を盛り上げていけるのが理想的な姿だと思います。



フラダンスの発表で利用

舞台上で発表するとき、照明の演出がすごく素敵で、一生懸命練習した成果を発表する場を盛り上げてくれるのがいいですね。客席と近いので臨場感を味わえるのも魅力です。



SING!の練習で利用

学校で作った作品が展示されているときもよく見に行きます。みんなが利用できる楽しい場所で、町の新しいシンボルです。

バリアフリーが充実しているので、車椅子を使うようになっても安心。この先も長く利用できる場所です。





私たちは.....結婚55周年 内田夫妻

住みよい便利な町へ
(妙子さん)夫婦円満の秘けつはお互いに思ったことをため込まず、言いたいことをはっきりと伝えること、そしてそれを根に持たないことです。お互いに好きなことを続け、趣味に対して口をはさまないことも大切です。結婚して子どもが生まれ



内田 忠さん・妙子さん
(新中野・33区)

て邑楽町に家を建てましたが、夫の仕事の転勤でしばらく町を離れて暮らしていました。夫の定年を機に町へ戻ってきましたが、図書館や公民館など当時は無かった素晴らしい施設が近くにできていて、普段からよく利用させてもらっています。この町はのどかで災害も少なく、身の回りのことは近場で済ませられるので、とても住みよい町だと感じます。夫も既に免許を返納して交通手段が限られているので、そういった人にも暮らしやすい町づくりが進むとさらに良いと思います。

55th Anniversary 町制施行55周年 連動企画

あなたは何の55?

町制施行55周年を記念し、町内で「55」の数字にまつわるさまざまな人たちを探し、町に対する思いをお聞きしました。

私は.....5月5日生まれ55歳 岩崎 陽守さん



岩崎 陽守さん
(十三坊塚・6区)

人との関わりを大切に
元は隣の栃木県出身で、約30年ほど前に家を建てたために邑楽町に移住してきました。その当時は近所も同じように新しく越してきた、同年代くらいの子もいる家庭が多く、周りとの協力しながら子育てをしていた思い出があります。

55年前(昭和43年)の出来事
川端康成ノーベル文学賞受賞
メキシコオリンピック開催
3億円強奪事件
など

30年近く町に住んでみて、この周辺は程よく自然も残っていて住みやすく、それでいて近隣のどこへでもアクセスがしやすい「ちょうど良い場所」だと感じます。移住してきた当時と比べると人口もだんだんと減少し、かつ便利な技術も発展しているのでも同士の関わりも希薄になりつつある世の中だと思えます。それでも、人と人との助け合いと触れ合いを大切にしていけるような、そんな町であり続けてほしいと思います。

私は.....創業55周年 株式会社ナカデン



中村 淳さん
(前原・4区)

人と人をつなぐお手伝いを
父の代から続く電気工事会社「中村電気商会」を引き継ぎ、昨年から社名を地域の人から親しまれる愛称の「ナカデン」に変更しました。個人宅から企業まで、幅広くいろいろなお客様から仕事をいただき、同時にいろいろなことを学ばせていただいています。そのおかげで人脈はとても広がり、例えば依頼先で困りごとがあったときに、それを得意とする別の企業を紹介するなど、人同士をつなぎ合わせるお手伝いをさせていただくことも。町には素晴らしい技術を持った企業がたくさんあるので、そういった人同士をつなぎ合わせ、町全体を盛り上げていけたら幸いです。

私たちは.....創業55周年 有限会社神谷造園



神谷 幸司さん・賢二さん
(光善寺・15区)

常に新たな挑戦を
(幸司さん)祖父の代から三代続く造園会社として、庭木の剪定から新たな庭造りの提案、カーポートの設置などお庭に関することなら何でも承っています。仕事はほぼ丸一日屋外での作業になりますので、夏の暑さは特に大変だと思ふこともあります。それでも、成果が形として残る仕事の達成感と、お客さまのよろこぶ顔が見られることに何よりのやりがいを感じながら働いています。仕事でのモットーは現状維持に甘んじず、元よりも更に良くなる意識しています。最近では近隣の町でも大きな商業施設ができたりと盛り上がりつつあるので、町も新たなことにどんどん挑戦していったらえれば、更に良くなっていくと思います。

私は.....生後55カ月 船生 琴美ちゃん (4歳7カ月)



船生 美紀さん・琴美ちゃん
(光善寺・15区)



自然と触れ合える場所がたくさん
(美紀さん)琴美が広報に掲載されてから、周りの反響がとても大きかったです。外で遊んでいると声をかけていただいたり、子育てのアドバイスをもらったりと、地域の人たちに見守られながら育ててもらっているのを実感しています。あれから4年と半年、琴美もすくすく成長して、今では何でも楽しむ我が家の面白番長に(笑)。また、家族をほっこりさせてくれる癒やし存在でもあります。町には公園もいくつもありますので、子どもが自然と触れ合える場所がたくさんあるのが良いところですね。